

## 職場の書庫にあった古い本

佐久間 隆（教授 日本経済論）

本との出会いは、書店や図書館で起こるとは限りません。これは、私が幸いにも職場で出会った2冊の本の話です。

どの職業分野でもその世界では定評のある必携本というものがあります。私が務めてきた行政の分野では特にそうです。そうした重要な資料である書籍は、代々の担当者によって読み継がれていきます。

私は、内閣府とその前身である経済企画庁で働いてきましたが、他の省庁に出向することも一再ならずありました。5年ほど前には農林水産省に在籍し、大臣官房審議官として生産局（当時）を担当していたことがあります。このとき前任者から引き継いだ書庫に糖業協会編「近代日本糖業史上巻」（1962年、勁草書房）という出版から40年以上も経った古い本がありました。サトウキビ（甘蔗）やサトウダイコン（甜菜）の栽培農業と砂糖を精製する精糖業を総称して「糖業」と呼ぶのですが、この局には糖業を振興する役割があった関係で必読の資料だったわけです。

読んでみると、協会編となってはいますが、協会常任理事と当時若手の経済史研究者、服部一馬、速水融両氏の3名を編集委員とし、服部氏が執筆した本格的な研究書でした。幕末開港以前の在来産業としての糖業に始まり、開港、近代糖業の創生、植民地であった台湾の糖業と目まぐるしい変遷が語られていました。明治期の経済発展における在来産業の役割を重視する立場の経済史家、中村隆英先生の警咳に触れた身としては、当然、在来の糖業に注目しますが、残念ながら、和菓子材料としての和三盆糖を除いて、在来糖業は存立基盤を失い、産業としての発展には断絶があるとのことでした。

そうなる気になるのが本書ではあっさりとしか語られない江戸期の内

地糖業や長崎の出島を通じた砂糖交易の歴史です。同書のはしがきに重要な先行研究 2 件のうちのひとつとして樋口弘著「日本糖業史」（1956 年、内外経済社）が挙げられていて、出典表示の不足という研究書としての欠点（著者は新聞記者）はありながらも体系的な日本糖業の通史として参考になるという紹介のされ方でした。

そこで農林水産省の図書館を探してみたのですが、同じ著者の「本邦糖業史」（1935 年、ダイヤモンド社）という 70 年も前に出版された本しかみつきませんでした。こちらは、「日本糖業史」の原形となった本ですから内容はほぼ同じでも、活字が旧字体でとても読みにくいものでした。しかし、この本のおかげで、江戸後期にサトウキビが想像以上に広い範囲で栽培されており、そうなるまでサトウキビ栽培や精糖の技術がどのように伝播したか、幕政や各地の藩政がいかに深く関与していたか、砂糖交易がどのように推移したか、大阪を拠点する国内流通がいかに発展したかなど、興味深い事実を知ることができました。その後、古書（中古）の「日本糖業史」が比較的安価で出品されているのをみつけ、今は手元にあります。

この文を執筆するにあたり、本学図書館の蔵書を確認したところ、上記の 3 冊がすべて所蔵されているのみならず、第二次大戦下で近代糖業が崩壊するまでを記述した糖業協会編「近代日本糖業史 下巻」と戦後の糖業史をまとめた同編「現代日本糖業史」もありました。上巻の数年後に出るはずだった下巻を手にとってみたところ、その出版年はなんと 35 年後の 1997 年でした。上巻出版当時は助教授だった著者の服部氏が名誉教授となられていたのには思わず苦笑しました。

糖業は、今また、日本が TPP に参加すれば大きな影響を受けると見込まれます。時代に翻弄されてきた、その歴史は、産業史研究、産業政策研究およびフードシステム研究において参照されるべき様々な事例に満ちています。